



煮炊きや貯蔵に使われた弥生土器(八日市地方遺跡)



シカとそれを狩ろうとする弥生人が描かれた絵画土器(八日市地方遺跡)



緑色凝灰岩製管玉の原石から製品まで(八日市地方遺跡)

(写真の提供、対象物の所蔵は小松市埋蔵文化財センター)

れた集落で、環濠集落は水稲農耕をもたらした渡来者集団の故地にみられる集落形態である。この環濠の機能としては防衛や排水、区画などが考えられており、時期によってその機能が違っていた可能性もある。集落は人びとが生活をした居住域と亡くなった人たちが

を埋葬した墓域から構成され、農耕が行われた水田跡や畠跡は確認されていない。居住域では木製品や玉類の生産も行われていた。
煮炊きに使われた甕形土器には煤やお焦げが付着しており、それを試料に二七点の炭素一四年代測定が実施され

ている。測定値を西暦に換算することで土器の使用期間を明らかにすることができる。集落の継続期間を推定することができる。それによれば、環濠集落は紀元前三五〇年から紀元前二〇〇年まで一五〇年間続いたと考えられる。
(山本直人)

弥生集落と農耕



八日市地方遺跡の環境の調査風景



溝で区画された墓(八日市地方遺跡)

水田稲作農耕が北陸に伝わるのは紀元前五〇〇〜四〇〇年で、九州北部に

伝わってから四〇〇〜五〇〇年過ぎてからのことである。それで水稲農耕が九州北部に伝わった紀元前九〇〇年はまだ北陸は縄文時代であった。野々市町ではイネの籾圧痕もみあづこんが見ついた縄文土器(紀元前八〇〇〜六〇〇年)が出土していることから、水稲農耕に関する情報や文物の一部は伝わっていたようである。

八日市地方遺跡ようかいちじかなたはこの地域の拠点的な集落で、日本海側では拠点集落が潟湖の沿岸につくられることが以前から指摘されている。水稲農耕を行う上で適した土地であったことや水陸交通の要衝ようしゅうで、舟運での港や津としての役割を担っていたことが要因としてあげられている。

また、八日市地方遺跡は環濠かんごうに囲ま